

地域の底力を信じ、市民一人一人をローカルヒーローに!

ながののNPOと市民をつなぐ機関誌

特集

どうなる？ 部活動の地域展開（地域移行）

- まんまるニュース
- Myストーリー 一般社団法人医ケアの輪 代表理事 山本 里江さん
- ねぼが行く！突撃となりのNPO 遊休農地 SOS 篠ノ井忠富農園
- お宝ざくざく地域を掘り起こせ！ 豊野・安茂里
- まんまるイベントスケジュール

まはる



三陽スポーツクラブでサッカーをする中学生



市民協働サポートセンターはSDGsを推進しています





どうなる？

部活動の地域展開 (地域移行)

青春の思い出が詰まっている人も多い部活動。これまで学校が担ってきた部活動を地域のスポーツクラブや民間団体などに移管する「地域展開（地域移行）」が進んでいます。主な目的は、教員の長時間労働の解消と、人口減少で学校単位での部活動を維持していくことが難しくなる中、生徒が多様なニーズに合った活動機会を得ることです。

一方で、具体的な課題も見えてきました。長野市での取り組みを紹介し、今後のあり方を考えます。

01

地域に開かれた部活動へ

長野市スポーツ課

長野市では、国や県の方針を踏まえ、令和5～8年度にかけて運動部活動の地域移行を推進しています。学校単位の「教育活動としての運動部」から、地域で楽しむ「地域クラブ活動」への転換を目指し、平日も含めた活動体制づくりを進めています。

目指す姿は、子どもが生涯にわたりスポーツに親しめる機会の確保と、地域全体で子どもを育てる環境整備です。活動種目の選択肢が増え、持続可能で多様な活動環境が整い、教職員の時間外勤務削減や働き方改革にもつなげていく狙いがあります。

市内の多くの中学校でも地域移行が進んでいます。ただ、活動場所が遠方の場合、移動のための交通手段確保や保護者による送迎負担が大きいこと、外部講師による時間の制約や費用面、事務局の担い手など、さまざまな課題も見えています。さらに、学校の延長線上で「仲間づくり」や「居

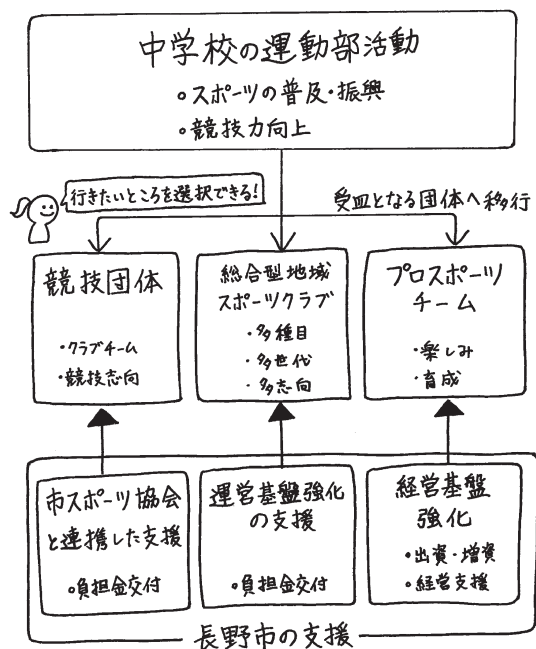
場所」を目的に入部していた生徒にとっては、移動や活動時間、費用などの負担から入部を諦めるケースも。これらの課題に対し、現在市では、「みらいハッ！」の活用促進や、送迎などに協力できる企業の募集に取り組んでいます。

今後は、多様な活動を提供できる団体の確保、地域クラブ活動が始まるまでの居場所づくりなど、地域での協力者を増やしていきたい考えです。

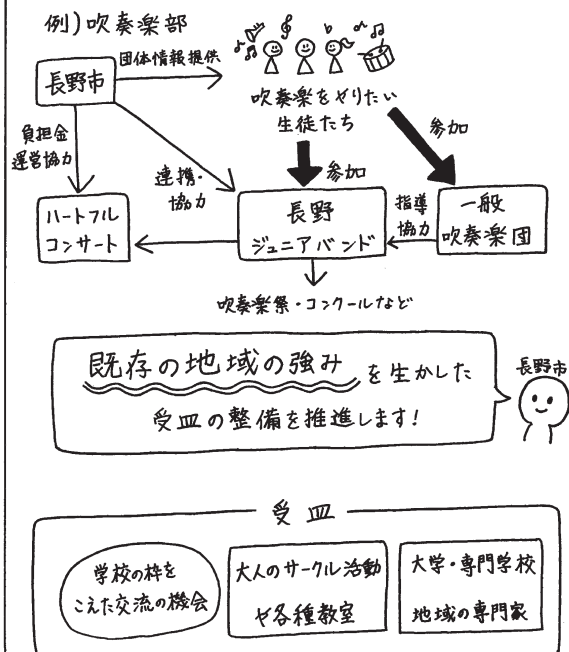
(※)市内の小中学生を対象に、習い事や体験プログラムに使える3万円分の電子ポイントを配布する事業



運動部活動の転換イメージ



文化部活動の転換イメージ





地域クラブのある意味

三陽スポーツクラブ

02



事務局の渡川宗宣さん

長野市が平日を含め部活動の地域移行を進める方針を決めてから、早い段階

で地域クラブを立ち上げたのが、長野市北部の三陽中学校を拠点とする三陽スポーツクラブです。地域総合型スポーツクラブとしてサッカーや野球、バスケットボールなど7種目10団体に約2000人の生徒が所属しています。移行に伴い、「放課後の過ごし方ややりたいことの選択肢が広がったのでは」と語るのは、事務局を務める同校教諭の渡川宗宣さん。地域全体から自分に合った活動を選べる点や、指導者が自ら望む環境で指導できる点、複数の指導者が関わ

ることで負担が分散する点は大きなメリットです。

一方で、活動開始時間が遅くなったことや、活動場所が学校外になったことで自力で移動ができずに入部を諦めるケースも

あります。また、指導者の熱量により活動に格差が生じやすいといった課題もあり、子どもや保護者の負担増も懸念されています。

「部活動は学校や先生が担うもの」という意識は根強く、支える人に負担が集中する形は変わっていない」と渡川さんは指摘します。以前は顧問を務める中で指導者が育つきっかけもありましたが、移行後は「どう関われるのか」が見えにくくなり、後継者不足が現実の課題となっています。それでも渡川さんは、「競技性を追求するだけでなく、子供たちの『挑戦したい』『楽しみたい』という思いを受け止め、地域に開かれた場とすることが地域クラブの意義ではないか」と語りました。

03

スポーツでつながる地域のか スポコミ東北地域クラブ

東北中学校区で、放課後や休日の部活動を地域で支える役割を担っているのが「スポコミ東北地域クラブ」です。運営するNPO法人

長野スポーツコミュニティクラブ東北（通称スポコミ東北）は、「スポーツで人

と人がつながり、地域と地域がつながる」をコンセプトに、地域に根ざした取り組みを続けています。大切にしているのは、年齢や種目を問わず、誰もが楽しくスポーツに関われる場づくりです。

今回の地域移行では、東北中にあつた11の運動部（男子・女子バスケットボール、男子・女子バレーボール、サッカー、野球、女子テニス、卓球、剣道、陸上水泳）をクラブとして受け入れました。同校の敷地内にクラブハウスを設置していることから、学校や保護者と連携しやすいことが強みです。活動には東北中の先生が担当職員として関わり、保護者も「見守り隊」として参加します。また、

東北中以外の中学生も受け入れ、地域全体の部活動の受け皿としてスポーツの裾野を広げています。

一方で、授業が終わってから活動が始まるまでの空き時間の過ごし方や、指導者の確保、謝金の財源不足、さらには競技成績に重きが置かれる風潮など、課題も少なくありません。

「会費の値上げは心理的にもハードルが高い」と話す理事長の藤牧博和さんの表情からは課題解決が一筋縄ではないことがうかがえます。それでも会

費の値上げは心理的にもハードルが高い」と話す理事長の藤牧博和さんの表情からは課題解決が一筋縄ではないことがうかがえます。それでも会



会長の柳見澤宏さん（左）と理事長の藤牧博和さん（右）

長の柳見澤宏さんは、「今は大変な時期だけれど、課題が見えることは前進でもある。ニーズや魅力を探りながら、トライ＆エラーで進めて地域として解決していきたい。また、勝ち負けだけでなく、スポーツそのものを楽しめる文化を育てていければ」と前向きに語りました。

04

産学連携の試み 一般社団法人Nagano Tech Style Lab （ナガノテックスタイルラボ）

一般社団法人Nagano Tech Style Labは、県内の技術系部活動の地域移行を支援しよう

と今年4月に発足しました。技術系の部活は指導者の絶対数が少なく、活動場所の確保と並んで大きな課



意見交換会の様子

題です。そこで、思いのある教員らを指導者として登録して地域クラブに派遣するほか、大学や企業などの協力も得て産学連携による地域移行を目指します。

8月31日に信州大学教育学部でキックオフイベントが開かれ、今後の構想が紹介されました。同法人の代表理事で信州大学教育学部の村松浩幸教授は、「中学の技術部での活動がきっかけで高専に進んだ生徒もあり、部活の経験が将来につながる」と、部活の必要性和可能性を語りました。

イベントでは教育委員会

05 地域と育てる体験の場

とがくしっこ応援団

8月20日、戸隠中学校にて、軽音やドローン、ス

や現役の中学校教員、地域企業による意見交換会を実施。企業の代表からは、「部活に関わることは企業として地域の役割を果たすこと。一つの企業でできないことは他企業と連携していきたい」という意見が出ました。

また、この日は篠ノ井西中学校の技術部部長と高校生を中心としたOBたちも参加。今年11月をもって廃部が決まっている同校技術部の活動継続に向けて支援を求めました。同校技術部では卒業後もOBが定期的に部活に参加し、後輩たちに技術を伝えています。卒業生の宮島怜生さんは「地域移行によって幅広い年齢層が参加するようになればメリットも大きい。活動継続に向けて動く人がいなければ自分たちで動くしかない」と前向きです。

ラックラインが体験できるカルチャーマルシェが開催されました。主催したのは、とがくしっこ応援団の住民自治協議会が掲げている「みんなで育てよう！戸隠の子どもたち」をテーマにした戸隠教育のもと、保育園、小学校、中学校、吉田高校戸隠分校に関わる先生と地域住民が協働して子どもたちの育成を図ることを目的に活動しています。

「最初に取り掛かったのは保護者の意識改革」と話すのは、カルチャーマルシェ事務局の徳武有紀さん。子どもの減少により部活動の運営に限界を感じていた保護者たちは「地域移行といっても地域にバスケットやバレーボールの先生になる人材はいない」「移動手段がない」とあきらめモード。そこで、部活動という形態を継続するのではなく「新しいことをやろう」と声をかけ、バスケットボールを3×3（3人制バ



みんなで軽音！

カルチャーマルシェは

す。

「生徒の交流」も大事にしています。違う価値観の人との出会いも経験してほしいし、地域の良さに気がつけるのも、地域の外を知るから。だからこそ、カルチャーマルシェは地区外からの参加も呼びかけているそうです。

Conclusion



これまで多くの人が「部活動は当たり前にあるもの」と捉えていたと思います。しかし、これからは違うことが取材を通じてわかってきました。学校から地域に移行するにあたり、「なぜ部活が必要なのか？」「自分や我が子にとって部活とは何なのか？」「部活に何を求めるのか？」などを改めて考え、部活動を再定義する必要があるのではないのでしょうか？そのうえで、目指す方向に近づけて持続させるための努力を、学校・家庭・地域社会が手を携えて重ねていくことが大切なのではないかと感じました。

地域まんまる

「自治会の未来を考える！ 自治会の課題はどこだ!?」

～事業の棚卸しをしてみよう!～



7月13日、自治会の事業を棚卸しして、今ある課題を見直し、これからの在り方を考える交流会を篠ノ井交流センターで開催。自治会関係者やNPO、学生など約40人が参加しました。

講師は、新潟を拠点に地域支援を行うNPO法人都岐沙羅^{さらか}パートナーズセンターの斎藤主税^{ちか}さん。長野市の人口構造の変化や課題をデータで示し、「これまで」とこれから「は違う」と強調。自治会の活動を考える際、地域や社会の状況変化に合わせて、「やりたいこと」「できること」



オープニングはみんなでラジオ体操をしてすっきりリフレッシュ!

「求められていること」の見直しが必要だと語りました。

後半は、自治会の事業を見える化するワークシヨップ。自分の地区の年間行事や会議を書き出して負担を洗い出し、改善点のヒントを探りました。参加者からは、「課題がはつきり見えた」「まずは役員と話してみたい」といった声も。斎藤さんは、「まずは小さな取り組みから。うまくいかなければ戻してもよいという空気を作り、変わることに抵抗感を下げることが最初のステップ」と話しました。その上で、「地区単独で難しい場合は住民自治協議会の出番。地域単位で考え、一緒にできることがないか模索する場を作ってほしい」と呼びかけました。

「他地区の取り組みが参考になった」との声もあり、俯瞰的に自治会の姿を見つめ直す機会になりました。



白熱したグループワーク



NPOカフェまんまる 「食から地域を考える」

8月7日、「食から地域を考える」と題した交流会を開催し、「食」に関心の高い市民ら13人が参加しました。

前半は、信州ひらがな料理普及隊事務局の吉田百助さんが近年の米不足の背景や、日本の食料自給率が38%にまで落ち込んでいる現状を説明。「価格よりも、どんな社会に暮らしたいかを考えて行動す

ることが大切ではないか」と、食に手軽さや安さばかりを求める風潮に警鐘を鳴らしました。また、「食を考えることが、ふるさとの風景と暮らしを守ることにつながるので、は」との問いかけに真剣に耳を傾ける参加者の姿が印象的でした。

吉田さんから「地域で食をまかなうには仲間と小さく始めることが第一歩」などのアドバイスを受けた参加者たちは、自分たちにできる取り組みを話し合いました。「明日からプランターで野菜栽培を始めたい」という意見のほか、「子どもに本物を伝えたい」「田んぼにも市民菜園のようなしくみを取り入れたら魅力的」「地域のお祭りを通じて食と地域を盛り上げたい」などの声も聞かれ、食を通じて地域の暮らしやコミュニティを見直す契機となったようです。

#34

My
ストーリー

一般社団法人 医ケアの輪

代表理事 山本 里江さん

「一般社団法人医ケアの輪は、医療的ケア児（※1）の保護者同士の交流を目的として2020年に設立されました。現在、SNSを利用した情報交換や動画を使ったバリアフリーマップの作成などに取り組んでいます。」

代表の山本里江さんの次女は、医療的ケア児で車いす生活をしています。山本さんは長女の子育て経験から、次女が立てないなどの成長の違いに早く気づいたそうです。それが「レット症候群（※2）」と診断されたのは5歳になってからでした。

「学校で専門的な支援を受ければ、本人も楽しく生活できる」との判断から、次女を養護学校へ入学させることを決めた山本さん。中学部時代の誤嚥性肺炎がきっかけで器官分離と胃ろう処置を受けます。家でのケアも必要となる中、病院と家でのケアの違いなどに悩みはじめたそうです。「同じ立場の保護者はきつと困っているのではないか？解決するためには？」との着想から、クラウドファンディングに挑戦し、「みんなで楽しむ 医ケア生活」という冊子を作りました。

最近では今年6月に、医師や管理栄養士による講義

や看護師による注入の手技実演を交えた「ミキサー食教室」を開催。約50人が参加し、第2弾の開催を希望する声も多く挙がっているそうです。

将来を見据えた次女の進路選びなど、冷静で現実的な行動について尋ねると、「次女の病気が治るのならいくらでも泣けど、そうじゃないから」と語ります。今後無理なく活動を継続していくとしながら、「次女を生んだことにより、色々な学びが得られていることがありがたい」と結びました。

※1 医療的ケア児…人工呼吸器による呼吸管理や経管栄養、たんの吸引、導尿など、医療的ケアを日常的に必要とする子どもたちのこと

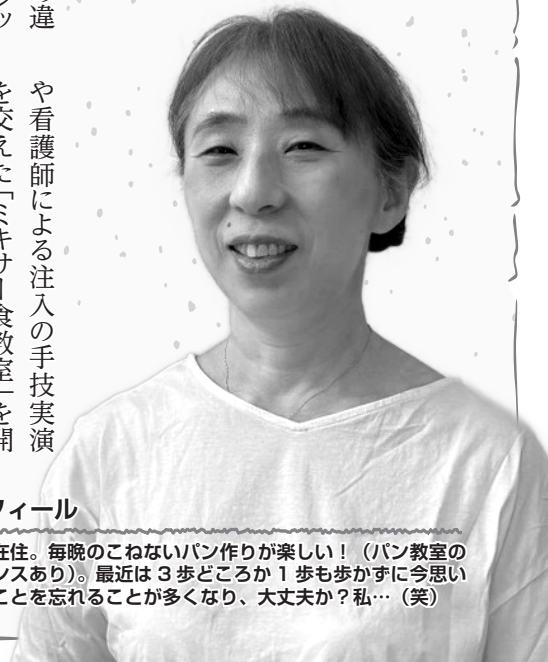
※2 レット症候群…遺伝子変異が原因で、一旦獲得した発達が行進していくという特徴を持った疾患

団体情報

一般社団法人 医ケアの輪
連絡先: info@ikeanowa.site
HP: <http://ikeanowa.site/>

プロフィール

長野市在住。毎晩のこねないパン作りが楽しい！（パン教室のライセンスあり）。最近3歩どころか1歩も歩かずに今思いついたことを忘れることが多くなり、大丈夫か？私…（笑）

ただとみ
遊休農地SOS 篠ノ井忠富農園

初対面同士でも自然と
会話が生まれる草刈り

2025年4月から活動を開始した「遊休農地SOS 篠ノ井忠富農園」は、活用されていない農地にさつまいもやハーブを植えて、草刈りやイベントを実施することで、農業の枠を超えた地域の人と人との出会い、新しいモノを生み出すことを目的に活動しています。代表の松本真紀さんは、「活動を始めたのは高校生の発想がきっかけ」と話します。8月2日の草刈り＆流しそうめん大会は、回覧板でイベントを知った移住家族や地元の高中生、子連れ家族や社会人など約70人が参加。「人数が多くて大変だけど夏休みだから受け入れたい」と松本さん。参加者に特技を披露する出番を作ったり、「大人は中学生に声をかけてね」と交流のきっかけを作ったり、農園をパワフルに駆け回っていました。



◀遊休農地SOS 篠ノ井忠富農園
公式LINE

縁日を通じて 縁を深く願う

豊野



大勢の人が集まった「とよの縁日」

スイカやトウモロコシの屋台が並び、本物の竹を流れるように子どもたちの歓声が響いていました。

た「とよの縁日」。7月30日、豊野地区有志による「豊野まちづくり委員会」が主催し、豊野防災交流センターで開かれました。

2019年の台風19号で大きな被害を受けた地域に昨年オープンしたセンターは、復興の歩みを映す新しい拠点です。交流ラウンジや子ども向けの図書スペース、防災倉庫やマンホールトイレなど多様な機能が備わっています。

縁日では館内を巡る防災スタンプラリーや、ソーラーワッシャーを使った調理体験も実施。

豊野東小4年生の女の子は、太陽の熱でゆでた卵をほおばり「自由研究にする！」と笑顔を見せました。

豊野まちづくり委員会の玉井優さんは、「ぜひ、センターに愛着を持って使ってほしい。縁日が地域みなさんのご縁を結ぶ場になれば」と話します。

その言葉の裏には、人々とのつながりを深めることが地域の防災にも役立つとの思いがあります。

お宝
ザクザク

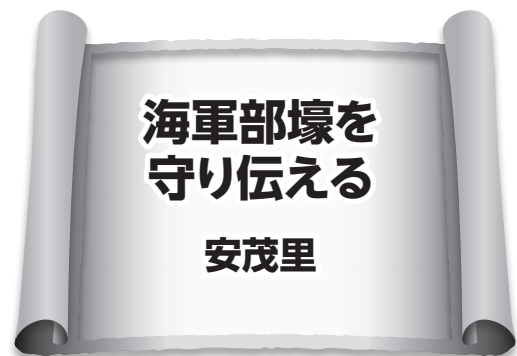
地域を 掘りおこせ!

豊野
&
安茂里



海軍部壕を 守り伝える

安茂里



安茂里の小事地区には、第二次世界大戦末期の海軍部壕があります。ここは、松代の陸軍による象山壕や舞鶴山壕（現・気象庁地震観測所）を遠望できる立地です。

この戦争遺跡について調査・管理保存を行なっているのが「昭和の安茂里を語り継ぐ会」です。6年前に活動を開始し、資料館を併設して、現在約15人の会員が在籍しています。

地元では昔から海軍の壕として知られていましたが、終戦で軍の機密書類は焼却され、詳細は不明でした。しかし、土屋光男事務局長を中心に、旧安茂里村の塚田伍八郎村長の終戦前夜の日記を入

手・解説し、小事に海軍が来た詳細が解明されました。他にも、これまで知られていなかった戦争の傷跡（小事の犀沢、篠ノ井の中尾山、筑北村山秋など）を明らかにしてきました。

この壕は個人所有であることも特徴の一つです。地元の小中学校をはじめ、全国から見学者が訪れます。

共同代表を務める塚田武司さんと岡村元一さんは、「子どもたちが資料館で曾祖父の時代のものを実際に手に取り、戦争を実感する貴重な場。大本営海軍部壕を後世に伝え、平和を考える契機にすることが我々の使命だ」と話します。



裾花中学校生徒による海軍壕見学会



市民協働サポートセンター スケジュール

2025年10月▶12月



タイトル	日時	会場／費用	内容
あなたの想いを事業（カタチ）に してみよう	10月11日(土) 17:00~19:00	市民協働サポートセンター 参加費：無料 対象：誰でも	地域の中で気になっていることややってみたい企画はあるけど、何をしたらいいかわからない……。そんなモヤモヤやアイデアを言葉にするワークショップです。地域での清掃活動やまちづくりイベントなど、あなたの想いを事業（カタチ）にしてみませんか？※自己啓発セミナーではありません
NPO カフェまんまる 「地域まるごとキャンパスで コラボしよう！」 	12月7日(日) 13:00~16:00	長野県立大学 三輪キャンパス 参加費：無料 講師：高城芳之さん (NPO 法人アクションポート横浜・代表理事) 対象：関心のある人	地域活動をするうえでカギとなってくる「協働」。一人ではできないことも、誰かとつながり、多様な人や組織が手を携えることが可能になります。今回は若者の地域活動プログラム「地域まるごとキャンパス」に焦点を当てます。NPO や企業・学校との協働と若者の社会参加についてみんなで考えながら交流しましょう。
まんまるボランティアサロン ①ボランティアさん集まれ！ ②機関誌発送サロン	①毎月第4火曜 10:30~13:00 ②12月26日(金) 10:30~13:00	市民協働サポートセンター まんまる (もんぜんぷら座 3 階) 参加費：無料 対象：誰でも	まんまる開催のボランティアサロンです。「誰か」や「自分」のために、楽しく無理なくボランティアをしませんか？10代から90代までいろんな人が活躍しています！ ①カレンダーや新聞紙を利用して封筒や紙バックを作ったり、その日によって作業は変わります。 ②3ヶ月に1回発行するセンターの機関誌を発送する作業です。封筒へのラベル貼り、機関誌やチラシの封入をします。

開催方法などが変更になる可能性があります。ホームページやフェイスブックでも随時情報発信しています。あわせてご確認ください。

地域 × 学生 の 協働



大豆島地区住民自治協議会は、毎月第1水曜日に未就園児親子向けの子育てサロン「まめっ子サロン」を開催しています。8月には夏休み特別企画として、学生と協働し、ダンスや魚つりゲーム、風船遊びや絵本の読み聞かせなどを実施しました。学生の工夫や関わりにより、会場は笑顔であふれ、22組65人の親子が楽しい時間を過ごしました。



長野市建築業協会は、8月22日に埴生遊水地整備の現場見学とドローン体験会を実施しました。埴生遊水地は千曲川流域の治水対策として整備が進められており、当日は川中島建設株式会社の作業現場を訪問。参加した高校生は、最新技術であるドローン測量を体験しました！

▲学生との協働の詳細は「地域まるごとキャンパス」のHPから♪



はココに！

「機関誌まんまる」 設置場所募集！！

機関誌まんまるは、市内の支所・公民館・図書館などの公共施設をはじめ、市民活動や地域活動に共感いただいている店舗などに設置しています。現在、無償で設置いただける場所を募集しています。

まずはセンターまでお問い合わせください！

発行 / 市民協働サポートセンター（長野市）

TEL:026-223-0051 FAX:026-223-0052

〒380-0835 長野市新田町 1485-1 もんぜんぷら座 3 階

e-mail : npo@nagano-shimin.net

ホームページ : <https://nagano-shimin.net/>



編集後記

皆既月食をみるために早寝早起きしたので、眠気と闘いながらこの原稿を書いています。天体ショーは見るだけにしようと思っても、ついスマホで写真を撮りたくなってしまいます。最近のスマホカメラはすごい!! (スタッフH)

